

『教授』(*The Professor*)に見る シャーロット・ブロンテの大陸とイギリス

松 原 典 子

目 次

1. はじめに
2. シャーロットの大陸
3. 登場人物
4. おわりに

1. はじめに

シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë) の処女作である『教授』(*The Professor*) と、遺作¹といえる『ヴィレット』(*Villette*) は、ベルギーの首都ブリュッセルを背景とした小説である。『ジェーン・エア』(*Jane Eyre*) と『シャーリー』(*Shirley*) はイングランドを背景とし、登場人物も『シャーリー』の主人公ムア兄弟と姉 (Robert, Louis, Moore) がアントワープ出身のベルギー人 (ベルギーとイングランドの混血) である以外、大陸描写は希薄である。

シャーロットのイギリスへの愛国心、祖国愛がブリュッセル留学中に高揚し、ベルギーを中心とした大陸人や文化、習慣などに対する思いや考えがこれらの作品の中になりに詳細に描写されていると考えられる。これはイングランドの北に位置する片田舎のヨークシャー育ちの若い女性が、異国の地でイギリス人であることを認識していったからだと思われる。

ところで『教授』が1857年6月に出版できたのは、アイルランド人の夫ニコルズとギaskell夫人²の尽力によることは周知の事実である。この作品はシャーロットがベルギー留学から帰国後すぐに執筆し、1846年には出版するつもりだった。つまり留学中のシャーロットの大陸での感慨などが『ヴィレット』より極めて私的に挿入されたと考えられる。

そこで本拙論ではベルギーを背景とした二つの作品のうち、『教授』に視点を当てることにする。つまりベルギーという異文化が濃縮された記憶の中で書かれ、シャーロットの大陸

批判が作品をリアリティ溢れるものとしたと捉えることができるからである。

2. シャーロットの大陸

シャーロットがベルギーに留学したのは1842年2月だった。しかし途中、伯母の死により同年11月に一度帰国している。その後、翌43年1月再びベルギーへ向かった。そしてその翌年44年1月に帰国する。この延べ2年間でシャーロットの経験した留学生活であり、大陸を見知った期間である。この時期はシャーロットにとっての遅い青春時代であった。1816年生まれの彼女は25歳の年の行った女学生だった。そしてこの年齢が彼女をいっそう学業に精進させることになった。真摯な態度で学習することで、いっそう大陸の学生に対して冷徹な目で観察することが可能となったのである。さらにベルギーという地が多く的大陸人の混在した社会であったことで、シャーロットに注視させる機会を与えることになった。

シャーロットの前半生はハワースの閉鎖的な牧師館の生活と寄宿学校の生徒、そしてガヴァネスの経験くらいであった。しかしシャーロットのブリュッセルでの生活は新鮮さ溢れたものだった。彼女は新しい経験を全て受け止めるのではなく、一歩引いたところから冷静な眼で観察をしている。

シャーロットは大陸から次のような手紙を出している。

Brussels is a beautiful city. The Belgians hate the English. Their external morality is more rigid than ours. To lace the stays without a handkerchief on the neck is considered a disgusting piece or indelicacy. (May 1842, to Ellen Nussey)³

ブリュッセルは美しい街です。ベルギー人はイギリス人を憎んでいます。彼らの外面的な道徳は私たちの道徳より厳格です。首にハンカチを巻かないでコルセットの紐を締めるのはむかむかするほど下品なことだと考えられています。⁴

シャーロットがベルギーに第一歩を記したのは1842年2月であるが、上に示した手紙の日付は不明確であるが、少し勉学のリズムをつかみ塾内の人間を観察する余裕が生まれ、エミリと二人で外出するようになった頃だと想像できる。つまりこの手紙はシャーロットのブリュッセルの第一印象といっても過言ではない。そしてこの第一印象が彼女の大陸留学の最後の日まで継続するのである。この感想が『教授』の登場人物に投影されている。男性と女性に分け、彼らの人物描写を検証していく。

3. 登場人物

『教授』はエジェ塾で学んだ「描く」ことを実践した最初の作品である。そして登場人物

の多くが実在の人物をモデルとしていることは周知の事実である。作品の特徴がリアリティにあることがそれを物語っている。つまり登場人物の設定は、シャーロットの狭い人生経験から創作され、彼らはベルギー留学時に見知った人物であり、シャーロット自身が経験した時点での自身の感情、感想を登場人物に吹き込んでいる。そして彼らは『ジェーン・エア』のジェーンの叫びがシャーロットの声であったのと同様、シャーロットの声ということもできる。

『教授』には、イギリスでは一度として経験しなかったシャーロットの恋愛感情が露呈している。彼女自身そのことに気づき、自身の感情を同性のヒロインに託すことを躊躇し、結果主人公を男性としウィリアム(William Crimsworth)に感情移入した。そしてウィリアムが成功を収めイギリスに帰国する時、同伴したフランシス(Frances Evans Henri)からもシャーロットの声が聞こえてくる。ウィリアムだけに投影できなかったシャーロット自身の大陸批判描写がフランシスの経験する生活を通して描写されているのである。

主人公のウィリアムは生粋のイギリス人であるが、幼児期に両親を亡くし、兄弟愛にも乏しい孤児同様に育ってきた。そのためイギリスを捨て大陸へ渡ったというのが本音である。一方、フランシスは母の祖国である「カナンの地」イギリスへ行くことを夢見、スイスからベルギーへ教養をつけるためやってきた孤児である。この二人を影に日向に見守る人物がハンズデン(Hunsden Yorke Hunsden)である。彼は一風変わった人物として登場するイギリス人である。『シャーリー』(Shirley)に登場するヨークさん(Hiram Yorke)と共通する‘Yorke’が、ハンズデンがヨークシャー人であると仮想させてくれる。

この3人はイギリスとベルギーを中心とした大陸観についてかなり手厳しく述べている。『教授』はこの3人が語る大陸物語という一面も持っている。

3. 1 男子学生

ウィリアムは、イギリスからベルギーに渡って初めて勤務した男子校で出会ったブラマント(ベルギー中心部の旧名)の青年について次のように語っている。

Their intellectual faculties were generally weak, their animal propensities strong; thus there was at once an importance and a kind of inert force in their natures; they were dull, but they were also singularly stubborn, heavy as lead and... having short memories, dense intelligence, feeble reflective powers, they recoiled with repugnance from any occupation that demanded close study or deep thought.⁵ (Ch.VII, p.56)

彼らの知的能力は全般に弱く、動物的本能は強い。性格には無力さとある種の鈍重な力とが同居している。頭は悪いのだが、非常に頑固で、鉛のように重く、まったくもって動かしにくい。・・・記憶力に欠け、知力は鈍く、思考力も弱い彼らは、集中した研究とか深い思考とかを要するすべての作業を嫌がって反発する。⁶ (第7章、84頁)

これらの特質を有する学生たちの集団的反抗により、ウィリアム以前に勤務していた英語教師の多くは辞任に追い込まれていた。二つの国、というかイギリス人と大陸人という国民性の差が彼らにとっての不幸であった。しかしそれまでの英語教師と異なり、ウィリアムは赴任早々彼らの特質に気づいた。また特質以外に、言語つまり彼らの発するブラマンド独特の咽喉にかかった発音もウィリアムにとっては耳障りで異様に感じられた。言語に関して、ウィリアムはベルギー上陸後、「少なくともベルギー人の話すフランス語（僕はそのときベルギー訛りのひどさを知らなかった）は、僕の耳には音楽のように聞こえたのだった。」（第7章、78頁）(French, in the mouths of Frenchmen, or Belgians (I was not then sensible of the horrors of the Belgian accent) was as music to my ears.) (Ch.VII, p.51) この体感はウィリアムにとって、自分が国際的環境の中にいるという確認となった。

この言語を話す代表的人物は、教師生活の中で一番印象に残ることとなるヴァンデンホーフ (Jean Baptiste Vandenhuten) である。彼は大変鈍重なフランドルの少年で、16歳で背は低く、澁刺さに欠けた存在であった。それは彼の「民族的特有である広く分厚い肉体的発育を示していた。」（第8章、86頁）(possessing a breadth and depth of personal development truly national) (Ch.VIII, p.86) と紹介される。

ウィリアムが引率した遠足で、ヴァンデンホーフは体形が酷いことでボートの縁に跪いたとたん片側に転がり、重みでボートは転覆した。その少年の救助は第21章で詳細に描写されているが、行為は教師として当然であった。しかし粘液質で正直そうな少年の父親は恩義を返したいと申し出た。この親子との関わりがウィリアムの人生に光を照らすことになる。つまり後日ウィリアムの窮地を救うことになる。これはベルギー社会の中で、しかも学校という小さな世界の中でウィリアムが頼れる人間は一人も存在しなかったという事実があったからでもある。

イギリスでの幼少時から青年時にかけてのウィリアムの孤独さと人間不信は、ベルギーで職を得てからも消えてはいなかった。学生の本質を知るにつれその度合いは拡大さえするほどであった。しかしヴァンデンホーフ親子から受けた恩という感謝の念が、ウィリアムの閉鎖的な心を溶解させた。

ヴァンデンホーフなる人物は、フランドル人ではなくオランダ人であった。しかし大陸人であることに変わりなく、ウィリアムが自分の価値観に合致しないと毛嫌いしていた人物に、困窮した自分を曝け出し、助けを求めたことは気になる事実として受け止めなければならない。それはウィリアムが人との結びつきの極度の少ない孤独な人生を送ってきたからである。感謝することも、されることも未経験だったからこそ、ヴァンデンホーフ親子はウィリアムの心に入り込むことができたのである。ではこの親子がベルギー人でなくオランダ人であったからなのかも考えてみることにするが、その前にウィリアムがヴァンデンホーフをフランドルの少年だと思った時点で彼には一種の偏見があったと考えられる。そこでフランドル人であるベルギーについて簡単に記しておく。

ベルギー (Koninkrijk België) という国家はローマによる征服以前はケルト系が住み、18世紀になってブラバント革命の時に基礎ができたといえることができる。つまりゲルマンとラテンの接点にあり、西ヨーロッパのほぼ中軸でもある。ゲルマン系のフラマン人とラテン

化したケルト系のワラン人の二つの民族からなる国家である。シャーロットの血に流れるケルトはベルギーでも一般的イギリス人より近距離に位置していた。首都ブリュッセルはベルギー北部に位置するため言語的には本来フラマン語であるが、ブルゴーニュ公爵領であったことからフランス語が浸透し、フラマン語にフランス語とスペイン語が混ざった独自のブリュッセル語を話していた。ブリュッセルを取り囲むベルギー北部はフラマン人地域で住民は自分たちの特質を勤勉、正直な人間と捉えフラマン語を話している。フラマン語は言語的にはオランダ語の一つの方言とみなされている。オランダ人のヴァンデンホーフはフラマン語を話す地域、つまりオランダ南部出身のベルギー人という仮定もできる。

ヴァンデンホーフがオランダ人であったので彼の発音はオランダ語の特徴、つまりはフラマン語も共通すると考えられるが、喉音(こうおん)「g」が使われ、この音にウィリアムそしてシャーロットは特に耳障りに感じていたのではないだろうか。この音は咽喉がおかしくなるような音で、オランダ人以外の外国人が出そうとすると、舌と唇は「ui」の発音に挑戦しなければならず、多くの場合この時点で音を上げるといわれている。たとえばゴッホを発音しようとする「ホッホ」に近くなるらしい。しかもヴァンデンホーフの話すオランダ語は7つの短母音、4つの長母音、3つの二重母音、17の子音があったと考えられ、これらが重なり合うことでウィリアムもヴァンデンホーフ少年を最初はあえて存在すら感じないようにしていたのであろう。

3. 2 男性

登場人物のうち、大陸人を代表する人物はペレ氏(François Pelet)である。彼の経営する男子校でウィリアムは英語教師生活を送ることになる。ペレ氏の第一印象は次の描写に表れている。

He was a man of about forty years of age, of middle size, and rather emaciated figure; his face was pale, his cheeks were sunk, and his eyes hollow; his features were pleasing and regular, they had a French turn (for M. Pelet was no Fleming, but a Frenchman both by birth and parentage), yet the degree of harshness inseparable from Gallic lineaments was, in his case, softened by a mild blue eye, and a melancholy, almost suffering, expression of countenance; his physiognomy was "fine et spirituelle." (Ch. XI, p. 78)

40歳くらいの、中背の、どちらかと言えば痩せこけた感じの男だった。顔は青白く、頬はこけ、目は落ち窪んでいた。顔立ちは気持ちよく整っていた。フランス的な顔だったが(と言うのはペレ氏はフランドル人ではなく、生まれも血統もフランス人だったから)、しかしフランス人の風貌と切り離せないある種の冷酷さは、彼の場合穏やかな青い目と、物憂げでほとんど苦悩を湛えたような表情によって和らげられていた。彼の骨相は fine et spirituelle(繊細で精神的)だった。(第11章、115頁)

ペレ氏はウィリアムにとって唯一の外国人男性(敵)となるが、当初の印象は悪くはなかった。しかし地元フランドル人に対する態度の冷淡さがペレ氏の人格を否定することへと繋がっていった。彼は酷使されているベルギー人の助教師たちに対し、常に無愛想で厳しかった。そこがウィリアム自身合点行かない所だった。驚くウィリアムに対して「あいつらはただのフランドル人ですよーハッハ！」(『生涯』、第11章、264-265頁)(Ce ne sont que des Flaman—allez!)(*Life*, Ch.XI, p.159-160, To Ellen Nussey)「あいつらは力仕事用の家畜ですよー畜生ですよ」(第15章、160頁)(Des bêtes de somme,—des bêtes de somme)(Ch.XV, p.110)と侮蔑の声を上げた。彼らは確かに純粋なフランドル人の容貌をし、知的劣等性の線がはっきりと刻まれていたが、正直者たちだった。その点がペレ氏から人間性を無視した虐待と軽蔑の対象にされた。彼ら特有の顔つきは、ペレ氏を通して大陸人に対するシャーロット自身の偏見と捉えることもできる。実際ペレ氏はシャーロットがひそかに愛したエジェ氏であることは周知の事実であるが、ペレ氏の内面描写に自身の大陸批判をすることでエジェ氏の存在を隠蔽しようとしたのではないだろうか。

もちろん作品中ではウィリアムの視点で大陸描写がされているが、同性同士の人物評価は、異性の評価とは異なり、恋愛感情が無いという点で客観的見方ができる度合いが高くなると考えられる。つまりシャーロットのウィリアム描写が及第点を取れないとしてもペレ氏の存在は、そして彼に潜む大陸人はシャーロットの大陸観を理解するのに十分である。シャーロットはエジェ氏がフランス人であったことで、ペレ氏をフランス的人物に設定し、彼にフランス人を想起させることでベルギー人を始めとした大陸人に対する偏見⁷をシャーロット自らイギリス人に表明しようとしたのではないか。

そしてペレ氏経営の学校は在学生からベルギー民族の縮図の体を示していた。つまりペレ氏だけがフランス人で、そのほかの登場人物はフランス人以外のベルギーを中心とした大陸人という構図である。ペレ氏に対するウィリアムの批判はシャーロットが蛇足として描出したのではないか。もちろんエジェ氏であることを隠す意図によるのである。フランス人だけ特別視することでエジェ氏を読者が想像、確信することを忌避したのである。

3. 3 女子学生

ヒロインのフランシス・アンリはレース繕いの教師だった。当時、レース編みは結婚を控えた若い女性の嫁入り修行のひとつであり、同時に老女といえる死を待つ独身女性の施設などで行われる女の手仕事でもあった。そしてレース編みで生活する孤児を際立たせるため、見目麗しい令嬢の女子学生たちが登場する。つまりフランシスはシャーロットの定番とする「否定される」人物として描かれていく。しかしフランシスの立場から考えると、女子学生こそが「否定される」人物群なのである。というわけで彼女から考えると、「否定される」人物が最後には自己確立に成功し、勝利者となるということになる。

ウィリアムはペレ氏の男子校に隣接する女子校の講師を兼任する。彼が大陸で見る若い女生徒たちは、若い男性が思い抱く女性とは異質の集団である。禁欲的な生活を強いられてきたウィリアムに対して、女子学生たちは彼を虜にする存在とは程遠いものだった。それは女生徒たちがイギリス人のウィリアムの清教徒的思想、心情に合致しなかったからである。

代表的な女子生徒を紹介しておく。

ユーラーは背が高く、実に見事なプロポーションの持ち主で、顔立ちも美しく女子校三人組の一人であった。低地地方のマドンナとでも称することができる存在であった。キャロリーヌは成熟した官能的だが、将来起こしそうな多くの愚行が想像できた。シルヴィーは媚態と無益な小細工をする授業妨害の代表格であった。女子学生たちは14歳から20歳位までの者が混在していたが、この三人組に代表されるようにおっとり育てられたはずであり、本来なら男の顔をまともに見ることもできないような恥じらいを示すものである。しかし最も若い14歳位であっても、慎ましやかに礼儀正しい子は一人もいないのが現実だった。図々しく厚顔で、媚びるような、愚かそうな流し目をウィリアムに注いだ。ドイツ・ロシアの混血のオーレリア・コスロフは18歳で、教育の仕上げるためにブリュッセルに送られてきたが、外観は醜くはないが、あきれるほど無知かつ無学。寄宿生ファナ・トリスタはベルギーとスペインの混血で自尊、決意、破壊性、闘争心が発達した15歳。ベルギー人のアデルは15歳にもかかわらず20歳ぐらいの成熟ぶりを見せていた。田舎出身のルーズは教養も礼儀にも欠けていた。シルヴィーに至っては服従の習慣すらなかった。もちろんイギリス人の生徒もいたが、そのほとんどが負債か不行跡のために故国を追われた者の娘であり、貧弱な教育、多くの悪習、宗教と道徳の初歩的理解すら身に着けていなかった。しかし彼女たちは知的で控えめな容貌、生来の節度と品位だけは醸し出していた。

当然大陸の十字路に位置するブリュッセルの有名な女学校にはシャーロットの在籍したエジュ塾以外の女子寄宿学校にも大陸各国から多くの子女が留学していた。『教授』に描かれる女子学生の姿はシャーロットが偏見や単なる好みから描いたものではないといえる。フランス人、オーストリア人、プロシヤ人も多数在籍し、フランダース人と机を並べていた。しかし数の原理のせいか、大方の女子学生は上述した処女性とは程遠いものだった。ウィリアムはこの特徴を宗教に関係するものだとして認識していた。ローマ教会の教義ではないにしろ、その教育の仕方にあると考えたのである。留学ができるということは相応の階級に属しており、成長過程では注意深く育てられたはずだが、大部分は精神的に墜落していた。彼女たちはかなり高い階級に属し、深窓の令嬢になるべくして育てられてきたにもかかわらず、男に媚びるような流し目を送る。彼女たちのこの墜落振りに対してウィリアムは宗教を持ち出したのである。つまりイギリスを誇らしく思っているのである。シャーロット自身も次のような手紙を書いている。

If the national character of the Belgians is to be measured by the character of most of the girls in this school, it is a character singularly cold, selfish, animal, and inferior... and their principles are rotten to the core... I consider Methodism, Quakerism, and the extremes of High and Low Churchism foolish, but Roman Catholicism beats them all. (Ch.ⅩⅦ, p.127)

ベルギー人の国民性がこの学校の大部分の少女たちの性質から測られるとすれば、それはものすごく冷酷で利己的で、人でなしで、愚劣です・・・節操は芯まで腐っていますから・・・私はメソディズム、クウェーカリズム、極端な高教会派、低教会派も

ばかげていると思っていますけど、ローマ・カトリック教にかかってはそれらも全ての物の数ではありません。(第17章、189頁)

シャーロットの女子学生たちに対する感想が、そのままウィリアムの教師として女子学生の観察眼と合致する。彼女の捕らえた愚劣さをウィリアムは授業のとき、女子学生たちの思考力の欠如、決められた一定時間きちんと授業を受けることができず、先生の話聞く態度が身につけていないという事実から把握した。

そんな中で彼が目にした女子学生が一人だけ存在した。それはフランスが男子校の英語の教師同様、女子学生からレース編みの教師として認知されない時期だった。女子学生たちに注意する声を聞いたとき、ウィリアムは「アルビオンの声であった。発音は銀のように爽やかだった。」(第8章、87-88頁) (the voice was a voice of Albion; the accent was pure and silvery)(Ch.VIII, p.127)それがヒロインのフランスである。もちろん一目見て顔つきからベルギー人でないことはすぐにわかった。肉感的でもなく、それほど陽気でもなく、無遠慮でもないが思慮深さが感じられた。彼は英語教師として彼女に接するにつれ、我慢強さと義務感を果たすという使命感を備え持っていることがわかった。この長所は他のどの女子学生にも見られない部分だった。イギリス人の母の部分フランスに多く現れていたのだろう。スイス人の血の部分をシャーロットはいかに捉えようとしたか想像できないが、宗教改革の地であるスイスに新教を重ねたのだろうか。とにかくフランスはイギリス人であり彼女にとって母の国イギリスは「カノンの地」だった。イギリスへの思い入れはシャーロット自身の留学中の心情と一致するところと考えられる。フランス自身「プロテスタントはカトリックより正直です。ローマ教の学校の建物は壁に穴があり・・・少しも信用なりません。彼らはみな嘘をついても構わないと思っています。みんなが心に憎しみを抱いて口では友情を語ることを礼儀と呼ぶのです。」(第8章、91頁) (they are more honest than Catholics; a Romanish school is a building with porous walls... very treacherous; they all think it lawful to tell lies; they all call it politeness to profess friendship where they feel hatred.) (Ch.VIII, p.61)と、女子学生たちを宗教という点から人間としての善悪の判断基準を置いていることが分かる。

フランスは大陸人であっても、自身はイギリス人であるという強い思いを持っている。この事実はシャーロットがフランスを自身に置換し、大陸の女子学生批判をしたといえる。

3. 4 女性

大人の女性の代表的人物はゾライード・リューター (Zoräide Reuter) である。しかしウィリアムが最初に大陸の女性だと認識した人物はペレ氏とゾライードの母親たちだった。ペレ氏の母は「本物のフランス人の老女だった・・・大陸の老女にしか見られないような醜い老女だった・・・大変派手な色合い・・・大変なお喋り・・・」(第11章、117頁) (a real Frenchwoman;.. she was now ugly, as only continental old women can be;.. she would put on some very brilliant-coloured dress,... an incessant and most indiscreet talker...) (Ch.XI, p.79) である。この特徴が貴族階級に属す世界で唯一愛する亡き母とは

対極の人物であり、大人の女性として全く相容れない女性像をウィリアムに植えつけた。その女性こそベレ氏の母親の最大の友人、後にベレ氏と結婚するゾライードの母であった。

「ひどいブリュッセル訛り・・・下品で粗野な老婆・・・陽気で開けっぴろげなフランドルの農家の主婦か宿屋の女将の風采であった・・・ベルギーの老女たちはわが国の恐れ多いお婆様たちが下品の極みとして控えるような、態度や物言いや表情を平気でする・・・陽気な顔は、彼女も自国の通例に違わないことを証明していた。」(第12章、141頁)

(an accent of broadest Bruxrllois.... how so coarse and clumsy an old woman... more like a joyous, fee-living old Flemish fermière, or even a maitresse d'auberge,... In general the continental, or at least the Belgian old women permit themselves a license of manners, speech, and aspect, such as our venerable grand-dames would recoil from as absolutely disreputable,...) (Ch.XII, p.95)

二人とも息子と娘が学校、寄宿塾を経営するという知的階級に属する「母」であるが、彼女たちはウィリアムにとって、イギリス人には到底ありえない女性として描かれている。その点が、後に彼を罠に陥れる大陸人を予測させるのである。シャーロット自身母を知らない孤児であり、「母」に対する憧れをウィリアムの「母」に詳細な描写は避けながらも、その対極に位置する非イギリス的老女を大陸の女性の完成作品として描いたのではないか。この二人の若かりし日を思い起こさせる姿が、ゾライードの容貌と人間性に見て取ることができ、彼女を最終的には否定的人間として描き出している。この姿は後にシャーロットが『シャーリー』で描くイギリスの老女とは対極の女性像である。若年時には表れにくい人間の本質が、この二人の人生経験者から見えてくることで、反大陸というシャーロットの想いが強く語りかけてくる。

ゾライードは、一時ウィリアムが成熟した女性として結婚まで考えた人物である。彼女が彼を誘惑したのである。彼女の母をすでに受け入れがたい大陸人として見なしていたにも拘らず、ゾライードに対して愛を感じるようになったのは、彼の中に大陸人に対する嫌悪が消失してきたかと想像できるが、これは作品の展開上、絶対にシナリオとして成立させなければならないものである。

恋に落ちたことは「髪も肌の色も、非の打ち所がありません。身のこなしも、全くベルギー流ではありますが、優雅そのもののなのです。」(第11章、117頁) (her hair and complexion are just what I admire; and her turn of form, though quite Belgian, is full of grace.) (Ch.XI, p.79) というウィリアムの賞賛の言葉から明白である。ベルギー人を優雅でない国民と決めてかかっているからなのか。恋に落ちたからなのか。恋の対象は優雅であることが条件なのか。ただ知的という点ではゾライードは合致していたが、カトリックであるということが問題であったようだ。彼女がプロテスタントとして育ったならさらに磨きが

かかったと思うのだった。しかしその宗教が彼女の美点を全て壊す事実が勃発した。彼女はすでにその時点でペレ氏の婚約者だったのだ。ウィリアムは弄ばれていたのだった。さすがに世間知らずの青二才というところか。ゾライードは若い青二才のウィリアムを手玉に取ったのである。彼女の中にイギリス人に対する支配観があったのだろうか。当時のイギリスは産業革命は成功させていたが、大陸人、特に作品に現れるフランス人、ベルギー人の深層にはルネサンスから続く文化の先進に誇りを感じ、イギリス人に対して優越感を持っていた。ベルギーではウィリアムの中に貴族の血が流れていようが、全く問題ではなかった。

「どこの馬の骨とも知れない外国人を、あなたよりも好きになるわけが無いでしょう。」(第12章、140頁) (How could I prefer an unknown foreigner to you?) (Ch.XII, p.95) とペレ氏に語る場面など阿婆擦れ女を思わせる。ウィリアムが外国人であるゾライードに恋をしたにも拘らず、彼女が外国人を結婚相手にしていなかったということは、ウィリアムという一人の人間という以上に、外国人に対し嫌悪感を抱いていたのか。しかし婚約者のペレ氏もフランス人であり、外国人であるが、大陸人という共同体という共通項を感じ取っていたのだろうか。つまりイギリス人は後進国の人間だから、ということになるのだろうか。女子学生と共通する男を弄ぶという姿が大陸の女性の年代を問わずに描かれた特徴である。

しかしこのゾライードと対極に位置するのが、女子学生の中に引用したイギリス人であることを最高の願いとするフランシス・アンリである。そして男性としても成長したウィリアムはアンリの中にイギリス人を見出す。彼の結婚観は、つまり愛の対象者は知的であることが最低条件であるが、それに加えて、質素で真摯な態度を持ち、自分の道を突き進む人間であることが加味されるのである。容貌や外観が必ずしも美しくなくとも、生き方がその人間に美しさを与えていくことにウィリアムは惹かれるのである。これが彼の受けた大陸での洗礼だった。

4. おわりに

シャーロットはベルギー滞在中、エミリからヴィクトリア女王の様子を尋ねる手紙を受け取る⁸。女王の叔父レオポルドがベルギー統一後の初代国王として君臨していたことからシャーロットに女王を通して大陸の様子を聞いたかったのであろう。レオポルドはドイツ人であるが、ベルギーはローマ、スペイン、オーストリア、フランス、オランダによる占領という過程を経てヨーロッパの十字路となったという経緯があった。その事実こそ金銭的問題があったとはいえ、シャーロットが最初フランスへの留学を望みながらもベルギーへと変更することになったのである。またエミリがドイツ語学習に重点を置いたのに対し、シャーロットがフランス語にしたことはラテン志向の強さを推測できる。父が弟パトリックにラテン語を教えた時に抱いた「男であつたら。」という思いが潜在的に残っていたのかもしれない。ベルギーは国家としてはカトリック教国であったが、ブリュッセルはもちろん、アントワープなど資本主義的な大都市が既に発達していた。イギリスの片田舎出身のシャーロットと精神的に合致することは不可能だということは当然である。イギリス人の忍耐力が自立の道を進ませたのだろうか。

ところでベルギーでは冬が近づく万聖節(11月1日)に、墓地は花、特に菊の花でいっぱいになる。そして翌日死者の記念日には誰もが故人を偲ぶ。これはカトリックの儀式というよりケルト時代の名残と思われる。またブリュージュの絵からもわかるようにベルギー人は村で一生懸命働き、冬には凍りついた池でスケートをし、田舎の結婚式でワインとビールに酔い知れ、食べ過ぎの結果ズボンからはみ出るような腹になり、妻たちは開けっぴろげで地方色豊かなダンスに興じるという明るさを持っている。このような人的特徴もシャーロットの暮らしたヨークシャーの雲の垂れ込めた、短い夏の暗いイメージが付きまとうイギリスとは正反対の土地柄である。

これらの特徴から見えてくるものは、シャーロットがイギリスと正反対の場所を留学先に選んだにも拘らず、学生と教師という狭い世界ではあるが大陸批判をしたことは一見矛盾と思われる。つまり産業革命は既に過去の所産となり、世界に冠たる大英帝国の享受不可能な土地柄の中で生活し、結果シャーロット自身イギリスを一等国とは見なしでいなかったからではないか。幼少時から大陸への憧れ、つまり古典への回帰とネルソン提督への傾倒という二つの面を持っていたことも、彼女の中にイギリスと大陸に対する一種の葛藤があったと考えられる。ただベルギーの中にケルトが存在している事実にはシャーロットが気づいていたか明白ではないが興味深い事実ではある。

シャーロットが『教授』を描いた過程で、イギリス人であることを再確認しながら筆を進めたと考えられる。そして主人公クリムズワースがシャーロットの故郷ハワースの近隣のクリムズワース・ディーン⁹であることからヨークシャーを思い起こすこともできる。彼女の中にはイギリス人であることや、ケルトの血が濃いことにより、ヨークシャーで育ったことの方が意識の中に強く流れていたとも言える。

〈注〉

- 1 『ウィリー・エリン』と『エマ』が断片として残っているが、完成された小説としては『ヴィレット』が最後のものである。
- 2 パトリック・ブロンテの意向により、エリザベス・ギaskellは1855年、『シャーロット・ブロンテの生涯』(*The Life of Charlotte Brontë*)を出版している。
- 3 Elizabeth Cleghorn Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë* (London, Everyman's Library, 1971), Ch.XI, p.153. 以後引用文に続けて*Life*、Chapter、pageを括弧内に示す。
- 4 中岡洋訳、『シャーロット・ブロンテの生涯』、みすず書房、1995年、第11章、p.732。以後の訳は上記を使用する。このEllen Nussey宛の手紙の日付は初版、第3版とも1842年5月?になっている。以後、『生涯』、章、頁を括弧内に示す。
- 5 Charlotte Brontë, *The Professor and Emma A Fragment* (London, Everyman's Library, 1974), Ch.VII, p.56. 以後、Chapter、pageを括弧内に示す。
- 6 海老根宏・武久文代・廣田稔訳、『教授』、みすず書房、1995年。第7章、p.84。以後の訳は上記を使用し、章、頁を括弧内に示す。
- 7 白井義昭、『シャーロット・ブロンテの世界』、彩流社、1992年、p.87。
- 8 『生涯』、第12章、299頁で、シャーロットは「あなたはヴィクトリア女王のブリュッセルご訪問

について訊ねましたね。」(You ask about Queen Victoria's visit to Brussels.) (Ch. XII, p.181) と返信している。『生涯』はシェークスピア・ヘッド版使用のため1843年10月1日であるが、他の版では12月1日と記載してあるものもある。

9 日本ブロンテ協会編、『ブロンテ・ブロンテ』、開文社出版、1989年、p.174。

参考文献

『ベルギー人のまっかな本当 15』、マクミラン・ランゲージ、2000年。

『世界大百科事典』、平凡社、1998年。

『CD-ROM版 世界ことばの旅』、千野栄一監修、研究社出版、1999年。